

# 現代日本における儀礼文化の持続と変容の理解に向けて

國學院大學神道文化学部教授

石井 研 士

## 一、儀礼文化の「持続」と「変容」

儀礼文化の持続と変容と書けば、言葉の表現からは、儀礼文化は変容する部分と変化せずに持続している面があるということになり、持続と変容が同等の力なり均衡を保っているかのように見える。あるいは、特定の儀礼が衰微しても、それは様式あるいは形式が変化しただけであって、本質的には変化がないという議論さえもみることができる。本質的な変化が生じないとすれば、それは「持続」である。しかもこの「持続」は永遠の持続を意味することになるだろう。

言語学者のソシユールが概念化したシニフィアン（意味するもの）とシニフィエ（意味されるもの）や、形式と実体をめぐる哲学上の問題をここで改めて論じる必要はない。なぜならば、戦後の、とくに高度経済成長期以降の儀礼文化の変容は、我々の実体験からして自明であり、しかも根本的なものであることが承知できるからである。文化が「持続」していることは確かだとしても、戦後の儀礼文化を理解するためのキーワードは「変容」である。

高度経済成長期における私たち日本人の生活様式の変貌はすさまじいものだった。高度経済成長期における生活文

化と意識の変容を具体的な事例を通して検討しようとした『高度成長と日本人』は次のように記している。「この時期を境にして、日本社会は日常普段の生活のほとんど全局面で様相を一変させた。……高度経済成長の結果は、私たちが単に物的な面で、日本に長い間培われてきた伝統的な生活様式とはきわめて異質の世界におかれるに至ったというところにあるばかりではない。新しい変容は意識の全側面、心と体の問題まで含めた生の総体におよんでいる。」<sup>(1)</sup>

儀礼文化の変容の総体を把握するためには、個別研究のかなりの蓄積が必要である。しかしながら儀礼文化の現在に関する研究は、多くの研究者を刺激することなく、必ずしも高い関心が示されてきたわけではない。たとえば、日本人の国民的行事とでもいうことのできる初詣ひとつをとっても、その実体は明らかではない。警察庁が一月四日に公表している三が日の全国著名社寺の初詣者数の増加に依拠して、いかに多くの研究者が初詣の盛況さを論じているか。十一月十五日に行われているはずの七五三は、なぜ十月から十二月までに拡散してしまったのか。仲人をたてる結婚式が珍しくなり、挙式スタイルが神前式からチャペルウェディングへと急速に変化していったのはなぜだろうか。比較的よく知られている現象についても、現状と変化の実体はよくわかっていない。研究の蓄積はわずかである。

ここでは、明確な結論を導くには十分なデータが蓄積されていないことを承知の上で、戦後の儀礼文化の変容に関するいくつかの仮説を提示して見たいと思う。

## 二、伝統的儀礼の喪失

戦後、伝統的な通過儀礼は、しだいに消失していった。儀礼は地域社会から離脱し、「家」ではない「家族」を母体とした儀礼へと変容していく。儀礼を支える母体の変化は、儀礼自体の意味の変容を意味するものである。伝統的な通過儀礼は、表面上の形態を変えていく変化ではなく、その意味を変容させたのである。

柳田国男が主催していた郷土生活研究所は、昭和九年から昭和十二年までの三年間、日本各地の五十箇所を選んで山村調査を実施したことがある。<sup>(2)</sup>この調査は全国五十カ所という規模もさながら、百にのぼる山村調査項目によって日常生活の多様な側面を調査しており、当時の山村の様子がきめ細やかに明らかにされている。柳田が調査を実施してから五十年後、成城大学民俗学研究所は、柳田たちが調査を行った青森から鹿児島までの五十カ所の内、二十一カ所を選んで追跡調査を行った。<sup>(3)</sup>

山村民俗の五十年間の変化はさまざまの物だった。調査を担当した田中宣一は、高度経済成長が山村社会と山村社会において継承されてきた民俗に非常に大きな打撃を与えたと指摘している。<sup>(4)</sup>田中は具体的な要因として四点を指摘し、それぞれが民俗に及ぼした影響を記している。田中の指摘を敷衍する形で議論を展開することにした。

田中が指摘する第一は農林省の生活改善課による生活改良普及事業で、主に竈の改善を中心とした生活改良運動である。

高度経済成長期に、我々を取り巻く住環境が劇的に変化したことはよく知られている。戦後の住宅不足を解消するために昭和三十年に住宅公団が設立され、「団地」が<sup>(5)</sup>つぎつぎに建設されていった。ダイニング・キッチンを備えた2DKのモダンで合理的な団地は日本人のあこがれとなった。昭和三十年代における団地の出現はよく知られているが、この時期農村においても生活指導員による住宅改善が進められていた。石油、ガス、電気、水道の利用によって住環境は大きく変化することになった。土間は板間になり、都会風の台所が<sup>(6)</sup>しつらえられた。しだいに座椅子の食卓が増え、囲炉裏をめぐる民俗が消滅した。水神信仰も薄れていくことになったという。<sup>(7)</sup>は祀られにくかった。

第二は総理府主導の新生活改善運動で、旧暦に代わる新暦の普及運動である。生産や季節と結びついた旧暦は昭和三十年代になり産業構造の変化に伴って寂しい光景を示すようになる。

第三は公民館活動で、結婚式の簡素化が進み、結婚にまつわる多様な呪術的儀礼が消滅することになった、と指摘されている。先に引用した『昭和期山村の民俗変化』は、通過儀礼に関して変化の激しいものとして婚姻の儀礼をあげている。嫁の入嫁儀礼が消滅し出家儀礼や引移り儀礼が簡略化したという。理由は明白である。婚姻儀礼の主たる場が男女双方の自宅から外（公民館やホテルなど）へと移ったためである。

そして田中が指摘する第四は保健所の活動である。保健所や助産婦の活動によって乳児死亡率は激減するが、その結果「非常に呪術的であった産育習俗というものが、ほとんど根こそぎなくなる」ことになったという。七日間ほどは医療施設にいたるために、その間の儀礼が消滅したのであった。<sup>(8)</sup>

伝統社会において、出産は個々の家と地域社会の双方にとつて重大な出来事であり、多くの儀礼が行われてきた。しかしながらこうした儀礼は、出産が病院で行われるようになるにしたがつて、消滅するようになった。昭和二十五年には九五・四パーセントの赤ん坊が自宅で出産されていたのに対して、二十五年後の昭和五十年にはわずかに一・二パーセントの赤ん坊が自宅で産声を上げたに過ぎない。赤ん坊が自宅で父親や祖父父母や近所の人々に見守れられながら生まれてきた、どこにでも見られた光景は、高度経済成長期に姿を消していく。人間の「生」の誕生は「家」ではなく近代的な医療設備を整えた病院に移っていった。<sup>(9)</sup>

自宅出産が一・二パーセント、という現実には、出産に関わる民俗儀礼をも消滅させる結果となった。出産方法、産忌の観念、後産の処理、仮親の習俗など、生後一週間ほどの間に行われていた儀礼は消滅してしまった。その理由を同書は、出産場所が自宅または実家から公的施設や病院へ移ったこと、出産介助者がトリアゲバアサン等の素人から助産婦（産婆）さらには医師へと変わったことに主として起因していると述べている。

伝統的儀礼の消滅は、たんなる儀礼の消滅を意味しない。儀礼は世界観を確認するものであり、儀礼の消滅はそうした伝統的な世界観の消滅へとつながる事実である。

### 三、伝統的儀礼の変容

現在においても、これまでと名称を同じにして同様の儀礼が行われている。しかしながら、伝統的儀礼のかなりの部分が消滅しつつある現在、そうした儀礼がたとえ賑やかに実施されているかに見えても、儀礼の意味は変容している。

柳田国男監修『民俗学辞典』によると、成年式は「一人前の男女になったことを社会的に認められる式」<sup>(10)</sup>で、大人として社会的公認を得る通過儀礼である。満二十歳をもつて成年とすることが定められたのは明治九年の太政官布告によるものであり、以前は多く十三歳から十五歳前後に行われた。大人の仲間入りするに際して荒行や修行が課され、その中で「死」と「再生」を体験するなどの肉体的試練を受けた。

歴史学者の芳賀登は、成人式は生活者としての自覚を促す機会であり、成人式を経ることによって一人前の主体性が確立できると述べている。「成人式や成女式は、かつては人生の通過儀礼として必要以上に苦しさを与えており、これに耐える中で自らを鍛錬させた上で自立・自己修養させる機会となっていた」<sup>(11)</sup>。成年式を経ると、前髪を切り落として衣類の袖を短くするなど服装や髪型が変わり、若者組や娘組への加入が認められ、神事に参加することが許された。さらには、幼名が替わるなど、外形的にも大人の仲間入りしたことが明確に表示された。成人式は子どもが社会の構成員となったことを本人と社会が認識する儀礼である。

ところで現在の成人式には、芳賀が指摘するような大人になるための肉体的精神的試練も見られなければ、髪を上げたり着物が変わるなどの外形状の変化も見られない。明確に見られる変化は、法律上の権利義務が生じる点であり、公職選挙法に基づく選挙権を取得し、民法上の婚姻の自由、取引の自由が発生する。そして未成年者飲酒喫煙禁止法

の適用を免れる。このように、現在の成人式はもっぱら個人の内面的自覚の促進と法的地位の発生を主とするものであり、かつてのような地域共同体による大人であることの社会的認知の機会ではなくなっている。

平成十三年十二月にオーネットが実施した「新成人の意識に関するインターネット調査」によると、七五・五パーセントの新成人は「二十歳の自分を大人だと思っていない」と回答した。<sup>(12)</sup>男女の回答差が大きく、男性の六八パーセントに対して、女性は八三パーセントが「二十歳の自分を大人だと思っていない」と回答した。自分を大人だと思っていない理由は「経済的に自立していないから」が最も多く（八九％）、「精神的に自立していないから」（五六・九％）、「世間（社会）を知らないから」（四七・五％）と続いている。「精神的に自立していないから」「世間（社会）を知らないから」の回答では女性の回答率が男性の回答率を十パーセント以上上回っている。

伝統社会では、結婚は成人式を通過しないと認められなかった。社会的に一人前になっていることが大前提であったためである。しかしながら「成人」の意味が曖昧になるにつれて、「結婚」の意味も変わることになった。法社会学者の川島武宜は昭和二十九年に刊行された『結婚』（岩波書店）の前書きで次のように述べている。「結婚や恋愛の問題はこの数年のあいだ新聞や雑誌の大きな話題となっており、また人々——特に若い人々——の話題の中心となっている。人々は旧来の道徳思想や習慣に疑問をいだき或いはこれに挑戦し、「自由結婚」・「恋愛結婚」を賞賛し、旧来の結婚の儀礼を打破しようとし」ている。

明治時代に始まる神前式の結婚式は、高度経済成長期になって一般化する。結婚式の大量生産時代を迎えた当時、七割から八割の結婚式が神前式で行われていたと考えられる。自宅で行われていた結婚式・披露宴はホテルや専門式場で行われるようになっていく。昭和三十年代からの神前式結婚式の隆盛は、「神社・仏閣」での挙式ではなく、結婚式場やホテルに併設された式場での神前式結婚の増加であった。神前結婚式の普及は、挙式を「家」や地域社会から分離させる結果となった。さらには、ホテルや専門式場で挙式を司る神社側にとっては、それら施設を利用するカ

ッブルは必ずしも氏子ではないわけで、氏子であるかどうかとは無関係に結婚式を執り行う結果となった。

昭和三十年代、四十年代に隆盛を極めた神前式挙式は、その後しだいに衰退していった。『BB白書』によると、昭和四十年代に七割を超えていた神前式の割合はその後しだいに減少していき、平成二年には六八・五パーセントなつた。とくにこの十年の減少は著しく、平成六年に五割を切つて四六・五パーセントとなると、平成七年には三八・三パーセントで教会式と並び、翌平成八年にはついに割合が逆転してしまつた。神社新報は平成九年版の『BB白書』を取り上げて、教会式との逆転を報じた。<sup>(13)</sup> 数値の上だけからいえば、「海外挙式」がキリスト教式であることを考慮すると、すでに平成六年には教会式が神前式を上回つていたことになる。さきに、昭和三十年代と四十年代の神前式の増加が、神社においての挙式数の増加ではなくて、ホテルや専門式場での増加であつたことを指摘したが、神前式の減少もホテルや専門式場での挙式数の減少であることがわかる。『BB白書』に記載された挙式会場の変化を見ると、「神社仏閣」での挙式数にはほとんど変化が見られない。

神社と結婚式の関わりを、神社の境内に設けられた会館からみると、半数以上の会館は昭和四十年代に建設されていることがわかる。建設の理由は「社務所を改築するにあつて多目的利用の一環として」「地域の人々の求めに応じて」「神社の維持運営をするための収益を考へて」が四割ほど、「教化のため」が三五パーセントとなっている。神前式の挙式が昭和三十年代と四十年代に増加したとすれば、会館の建設は神社にとつて、しだいに神社への関心を失つていく都市民に対する教化活動の一環として意味づけられる活動であつたと同時に、新たな神社の財政基盤になるものと期待されたのではないか。しかしながらその後の経緯を見ると、結婚式はより豪華なホテルや専門式場へと移り、会館での挙式数は一部を除いて減少していった。<sup>(14)</sup>

なぜ昭和五十年代に入つて神前式が減少し、教会式が増加するという逆転現象が生じたのだろうか。平成九年に実施した会館を持つている神社に対する「結婚式に関する調査」のなかで、挙式数が減少したと回答した神社に自由記

入で減少の理由を書いていた。もつとも多かつたのは、教会式の隆盛による神前式の減少である。「チャペルでの挙式が増えたため」「教会の挙式にあこがれている若い人が増えた」「海外、チャペルでの結婚式が増えたため」といった意見が代表的なものである。チャペル式が増加したこと、なぜ若いカップルがチャペル式へと移っていったかについてはほとんど言及がない。

いまひとつ理由として神前式への反省がかなりの数の神社の回答に見られた。「ホテルでの挙式が流れ作業的だから」「神前に入れる人数の制限と、形式的で若い人が感動しないのでは」「神職側に責任があると思う。ピーク時に儀式を怠って何も対策を考えなかつた」といった見解が目立った。その他にも、価値観の多様化や人口の減少にともなう挙式数の減少、式場の過多などの指摘も見られた。

大学生に、将来結婚式を挙げるとしたらどのような挙式スタイルを選ぶか、そしてその理由は何かを書かせると、ウェディングドレスやヴァージンロードへの憧れに言及する者が少なくない。挙式スタイルの決定権は女性にあり、男性にはそこまでのこだわりが見られない。彼らは、かつてのように「家」と「家」の結びつきとしての結婚式を意識していない。アイドル歌手の結婚式に象徴されるように、結婚こそが人生最大の節目であり幸福であるとすれば、「幸せ」を演出するための「厳粛な」儀礼がどうしても必要となる。自分の育った家や環境から離れて、二人で新しい幸福な世界へと入っていくために、儀礼が必要なのである。愛情に結ばれた個人と個人の結びつきをもつとも儀礼らしく挙行することが可能なのは、愛の宗教であるキリスト教式ということになるのではないか。神前結婚式が「伝統」のイメージをまとい、「家」や「忍耐」を連想させるとすれば、チャペルウェディングは「新しさ」「個人」あるいは「解放」といった、個人の幸福をどこまでも追求する文化を象徴しているように思える。儀礼の意味は変容したのではないか。



#### 四、情報化による新しい儀礼の創生

松岡悦子によれば、出産がテレビや雑誌でヴィジュアルに紹介されるようになって「伝統的な出産に見られた「忌み」や「ケガレ」の側面はぐっと陰を潜めることになった」という<sup>(15)</sup>。お産のケガレは産穢といって死穢とともにケガレのひとつである。「共同体のコスモロジーに基づく語りではなく、医学的語りによって支えられることになった」<sup>(16)</sup>。出産は「あの世をも視野に入れた広い世界観から切り離され」ることになった。出産が医療的行為になったことは、子供の数の減少や出産の曜日が週の初めに偏りつつあることなどからも容易に理解することができる。

松岡は論文のなかでもうひとつ興味深い点を指摘している。現代の若い母親の方が、シニア世代より多くの産育に関する儀礼を行っているというのである。松岡が調査対象としたのは旭川の育児サークルに参加している母親六十七人で、シニア世代はその母親や祖母の世代二十四人であった<sup>(17)</sup>。

臍の緒を保存しているのは若い世代で九五パーセント、シニア世代で七五パーセント、宮参りは若い世代で約四十パーセント、シニア世代で一五パーセントと、伝統的と考えられる行事について、若い世代の実施率が高いのである。子供に一升餅を背負わせて、歩かせて転ばせる儀礼については、若い世代で九割が知っていてそのうちの八割が実施していたのに対して、シニア世代ではほとんどが知っていたにもかかわらず実際に行ったのは約半数だったという。明らかにこうした行為は、若い母親が読む情報誌の影響によるものである。シニア世代においては、伝承として伝わっていたとしても、実生活においては脱落しつつあった儀礼が、空白の儀礼文化の中に情報として位置を占めたのではないか。核家族の中で、赤ん坊の生態をほとんど知らない母親にとって、育児書はなによりも頼りになるものであった。他方でこうした儀礼は地域性を欠落させ画一化を招くものでもあった。

儀礼を支えてきた地域社会や家が機能を低下させていったとき、家族や個人はいやおうなく情報化の波に飲み込まれていく。その時に、本当に必要な情報だけを確に選択できる個人や家族がどれだけ存在するだろうか。周囲との違いを気にしながら、わずかな差異を生み出すことによって幸せを感じ取ろうとする現代日本人は、情報に依拠しながら新しい儀礼を創生していくことになる。

## 五、儀礼文化の衰弱と儀礼の未来

平成十二年に刊行された『人生儀礼事典』は、高度経済成長期に日本人の儀礼が変化したことを前提として、人生儀礼の昔と今を対比して説明している。同書は「昔の人生儀礼がどのようなものであったのかを理解するとともに、現代日本人の人生儀礼にも十分に留意し、それによって、現代にいたるまでの人生儀礼の盛衰が鳥瞰できるような項目の選定を試みた」という<sup>(18)</sup>。

同書は、高度経済成長期を境にした日本人の人生儀礼の変化は認めるものの、人生儀礼の構造自体の妥当性を疑問視していないようだ。つまり、誕生・子供の時代、大人への仲間入りをする中間的な期間、親の時代、第二の人生老後、葬儀と年忌という一方向的な人生の過ごし方は、高度経済成長期の前と後で多少年齢が異なっても、結局は持続していることになる。

現代における人生のあり方は、多様性という言葉によって特徴づけられるのでないだろうか。たとえば、結婚することを選択しない女性や男性が存在する。あるいは、親にならないことを選択する夫婦が存在する。散骨や個人墓は、たんなる物珍しさから確実な傾向へと移っている。人生に関する多様性とその容認の度合は、高度経済成長期以前と以後では格段と異なっている。儀礼を行う母体が、集団を基盤とするものから個人や、狭い個人の集団としての家族



に移動することによって、儀礼は、実施しないことも含めて多様性を示すことになったのである。

この多様性は個人や家族が積極的に自らのライフスタイルとして選択し構築するという積極的意味合いだけでなく、行動様式や生活様式の規範の崩壊と不一致という消極的な意味でも定義づけることができる。つまり、社会的儀礼でなくなった儀礼は強制力を持たず、個人は意味づけられることなく放置されるのである。子供から大人への儀礼は区切り目としての意味を喪失してしまった。行政の行う成人式は、大人であることの自覚を声高に叫ぶが、試練も社会的承認も存在しない儀礼は、青年を真の大人へと変容させる力を失っている。

それでも人生の節目に儀礼を実施することは、我々が生きていく上で必要不可欠であるようだ。その結果現代の日本人は雑誌や専門書、テレビの情報番組やインターネットのサイトに依拠しながら、儀礼を行うことになる。儀礼文化の正当性は、正当性を主張するものによって維持され、その正当性を認めるものが遵守することになる。日本における儀礼文化の未来は、高度情報化・高度消費社会の中で複雑な様相を示し続けるに違いない。

## 註

- (1) 高度経済成長を考える会編『高度成長と日本人』コロンブス個人篇 誕生から死までの物語』日本エディタースクール出版部、一九八五年、i—ii頁。
- (2) 柳田国男編『山村生活の研究』岩波書店、昭和十二年。
- (3) 報告書は、成城大学民俗学研究所『山村生活50年その文化変化の研究 昭和六十年年度調査報告』昭和六十二年、成城大学民俗学研究所『山村生活50年その文化変化の研究 昭和六十一年度調査報告』昭和六十三年、成城大学民俗学研究所『昭和期山村の民俗変化』名著出版、平成二年。
- (4) 田中宣一『山村の近現代における民俗変化』『國學院大學日本文化研究所紀要』第七十輯、平成十四年、二二—二二二

- 二頁。
- (5) 色川大吉『昭和史世相編』小学館、平成二年、四六頁。
- (6) 「住宅」高度経済成長を考える会編『高度成長と日本人 PART5 家庭篇 家族の生活と物語』日本エディタースクール、昭和六十年、四〇頁。成城大学民俗学研究所『山村生活50年その文化変化の研究 昭和六十一年度調査報告』昭和六三年、二二五頁。
- (7) 石井研士『データブック 現代日本人の宗教』新曜社、平成九年、六五―六六頁。
- (8) 成城大学民俗学研究所『山村生活50年その文化変化の研究 昭和六十年年度調査報告』昭和六十二年、二二五頁。
- (9) 高度経済成長を考える会編『高度成長と日本人 PART1 個人編 誕生から死までの物語』日本エディタースクール出版部、昭和六十年、二―四頁。
- (10) 柳田国男監修『民俗学辞典』東京堂、昭和二十六年、三二―三三頁。
- (11) 芳賀登『成人式と通過儀礼 その民俗と歴史』雄山閣、平成三年、三頁。
- (12) 首都圏・阪神圏の平成十四年四月に成人式を迎える独身男女四百名を対称に実施。『いとおき科学情報』Vol. 36、平成十四年。
- (13) 「結婚式調査B」白書 教会式が神前式を上回る。『神社新報』平成九年五月五日。
- (14) 結婚式と神社会館については石井研士『社会変動と神社神道』大明堂、平成十年参照。
- (15) 松岡悦子「妊娠・出産 いま・むかし」新谷尚紀・波平恵美子・湯川洋司編『暮らしの中の民俗学③ 一生』吉川弘文館、平成十五年、十一頁。
- (16) 同、一三頁。
- (17) 同、二五頁。

(18) 倉石あつ子・小松和彦・宮田登『人生儀礼事典』小学館、平成十二年、九頁。